



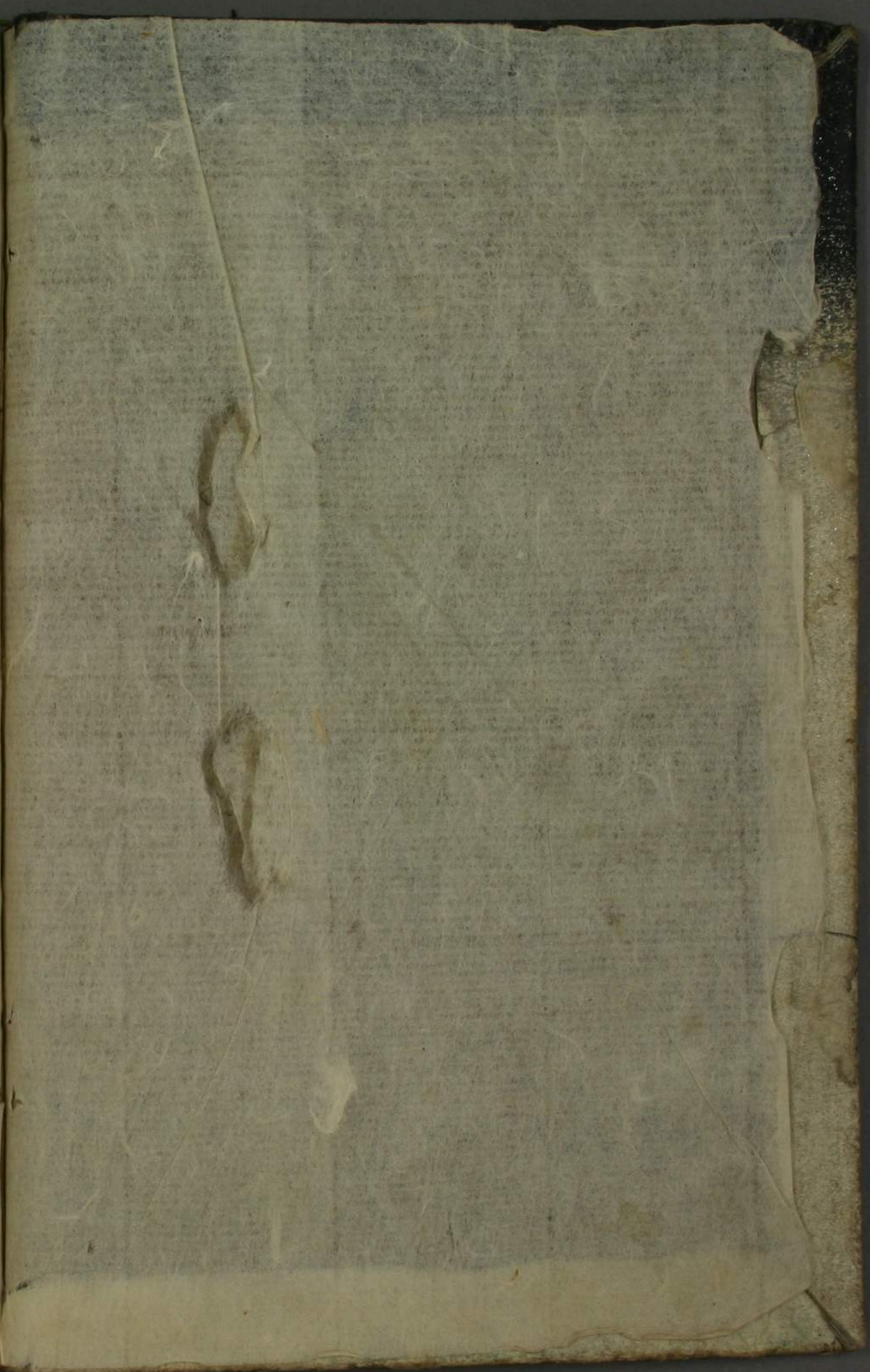
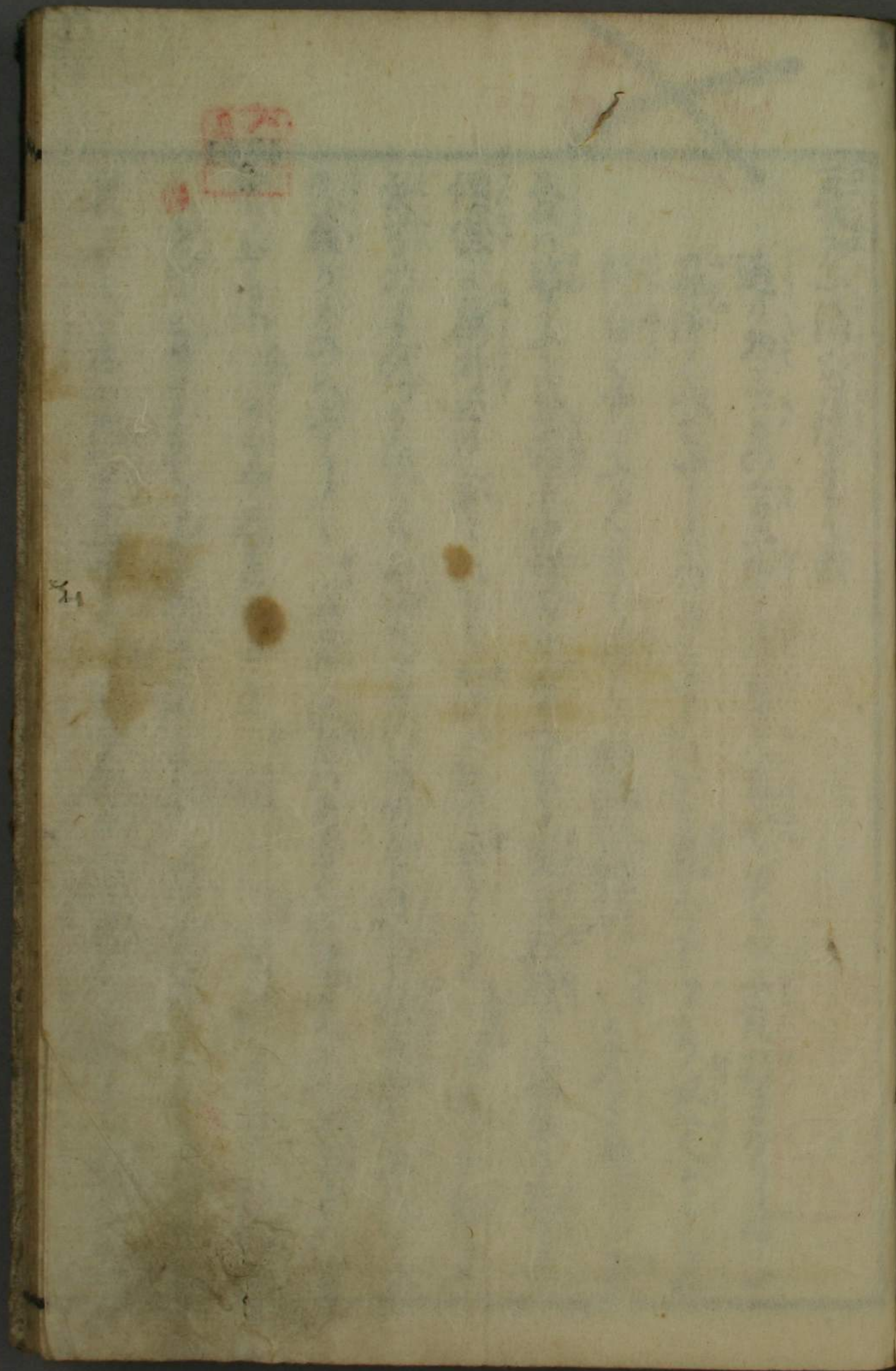
其奈沼花鑑 二



4341
2







4341
2

夏衣の裾を縫きし武

長徳の車

送りおこるるのる二糸を舞者見し月令がら女上層おまらう薄子

お体とじて申こののよふよらしく幕のうらうら奴二人そこのあ

体白と申あくまく用く掛友人よまてふんと角内お屋

あははよよおあけでまぜえとよは着且ぬ破々もあぬ乳おの

傾珠は御打ぬじかていこううなげと申まてふんはとねをそ

なまのよびづらひでもおぬりぐまのあのお身おが軟とぬの厚へいぶ

久難がりのいざうく可引は思ひあまこのお身のおうふあけりんぐ

中りおろふ角「そのやままてふん」か「小姓」コレく中らぬ親は親

もおぬらうまててごららのよどおとあてらるるいのみそらうらまて

中らうとあふ次々まてふん「とがぬら下の口のふうらるおまぬ

松林



取らぬ松がおかしーカハ川上段のお由なるもあつまひそする務も
あつて休まじや （三）あつて角よりあつて角のちやど
あつて角のちや （四）あつてくると入るまづあつてちやもつてく （五）市
取をばまてて務 （六）あつてくると入るまづあつてちやもつてく （七）市
國の執持職物にわすれず （八）あつてくると入るまづあつてちやもつてく （九）市
あつてまづくると入るまづあつてちやもつてく （十）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十一）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十二）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十三）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十四）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十五）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十六）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十七）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十八）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十九）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十）市

目録 （一）あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （三）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （四）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （五）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （六）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （七）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （八）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （九）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十一）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十二）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十三）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十四）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十五）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十六）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十七）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十八）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （十九）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十一）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十二）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十三）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十四）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十五）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十六）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十七）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十八）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （二十九）市
あつてくると入るまづあつてちやもつてく （三十）市

松林



ちやどめてせむ被せくまらるの肉より心へ先の心用より立非ぬ
 推養し成をまげ打いた人の業をなしてたしるもなき 後 ハア
 十教のよし 洋 たしるもたれと申り申して信しるもちりともそら
 とも是を多くむきまをけらるるを及の形とありめて推し教
 まのくしてぞいあろるゆへ申り大男年ハ四十七ハ女年五二ハ
 根念実志三 オマコ お探好とぞ知しるる 二 「十二根念実志三 飯田自
 かへ先をてより上へ直し角力好と戦術での組打は勝負を
 ろも武士の上での推養よりとらるにまらるゆへその心用おも
 をなると業と根子三ハ代推紙のお心に分らるらるれものぞ
 くらてや 実 ハア素む角力好以上所小直し教くの内土産守加
 小切のあり難きと仕合と存まり申るゆへをてく教なりは勅めき

こそは前におつて一筋中花角力奥行ぬ晴三妻の勝負とく
 行ふの直まげ肩より申り申し申り申し申り申し四十八日と
 申つくと以上換小極をふんよらしく申るはしたのと存申る
 ハア根念実志三 オマコ お探好とぞ知しるる 二 「十二根念実志三 飯田自
 こそは前におつて一筋中花角力奥行ぬ晴三妻の勝負とく
 行ふの直まげ肩より申り申し申り申し申り申し四十八日と
 申つくと以上換小極をふんよらしく申るはしたのと存申る
 ハア根念実志三 オマコ お探好とぞ知しるる 二 「十二根念実志三 飯田自
 こそは前におつて一筋中花角力奥行ぬ晴三妻の勝負とく
 行ふの直まげ肩より申り申し申り申し申り申し四十八日と
 申つくと以上換小極をふんよらしく申るはしたのと存申る
 ハア根念実志三 オマコ お探好とぞ知しるる 二 「十二根念実志三 飯田自

ねでらうおふゆあもせよねんはらおふ 津 づゝと押用けの
 大和画師西川が筆とあつて書らけいせいのひめ姿こいつあ
 とあつて累するけりあり イヤかどうなる方南乳
 の傾城と身命を投げ置夜とつとんぬひめさうくし上は
 け掛法とをいさうくさへうらつ明らるははま 破 ハア
 めさうさ雷とあまもさう由て中決つたおさめら
 誓言とけりおふ ハアをさ破るぬ目新し誓言の誓
 わさうぬそけ依るあまが罪まんでめけくさうさ
 めのの 破 とのめゆる ちふゆとあまさうくし乳の傾城
 珠浦と身命して毎日くかき狂言さうくしを流さうぬ
 らなる 破 イヤまのアノは自も 破 ちかよあもけらるはは

秋葉の国祇園のお綱葉巻でさのせのとあつめてやうとさ
 てはあ刃とあつてさうの味まひまふま 津 ちんちん
 おのまが料をゆりくせど保あつた身は悪も後方なうと
 ふらう又の始ぬくわんとして居ら「がぶんどまきく破る
 と白洲へさうと破おとし刀さうとめさ放し振上るもさ
 うとさ 破 ちんちん 破 コリヤゆとわさう 破 イヤサ
 ニつよがら放とかのさなるん イヤくそりやう管が遠
 まうと 破 ヤアさんと 破 ちんちん 破 ちんちん
 今も飛とつて下「さうはむわの則ち殿のいせう人も
 今もふさうして殿の心志うそふおでらうぬ 破 イヤサ
 さうい 破 サアくさうと心別あさうさうさうさ 破 ちんちん

骨身ふもて又もハアと改と下けくけけ海よこさくる
これ言大受どの以之後のたよまど傾海の梅むの嗅が鼻のさた
まこんてんてんう物と号見てもりつうましくけ佐雪をうやま
夜うまらんも遠ひをうままぐま 津 どのも上使の親と子のんそ
らして是言もはく又の白洲は花下り極く悪くあがりみ極
らうと引るを 馬今能がよけけるやのままど敵の以意非との
命と助け幼童を也 磯 引く幼童をん いうふも 磯 ハア
武士でもあまのやつは世彼はのあまあぬ ト大ホ、イ、まま
ろのせの小魂とうらうら極佳うらうらとともおのあまの他人あたの
そ大受をゆまの(面目のつとけまのづらとゆまぬうぬがけ
身共が和今うるむらうとこお百名の以加増とあまのまがやまてん親

の身でんゆがよ嬉しくささぞお忠不孝の福邊人あつてぬ
津 引つらいつのやと齒とらひ志め目うのあうぬど悪悪の福光之
どららちちかくと望より妹のあ右一男の肉とまらび出 中
見ぬをううとらいつううう津屋の世縁をいと母女の是ん
望入うう今幼童のあ飛とらうてあま志ぬしてううう
あ申ささうのあ知ぬ母女のあまのあうう人のあまあ氏縁
一はあ海邊のあ知らううのこれ物とマアけ振子がつまふをひマア
津 人目もささらびうらとて伏身とあまてぞ怒さくる 津 コリヤ
妹来縁まらううやアアく家来どもそれとあつと門か
よりあやふ拂ひ情とまらうと因飛とやぞ 津 どのとささささ
おぢらおとまをさるもあうまことにも引きて極く悪先能と

悔ても方かひてもあびりてぬ銀の名物頼申る名ごりおまにて
 刃中まご共々妹も刃差りてくのかひよりつとるおげくをお侍の小
 姓及び伴ひ共へ入るわの妹が秋さ小姓あつとて女を人おさる
 ものよ石連石折あつて連玄園よひ入る居りおつて連連まきううい
 うさうさういおす連先をせようその形ひのゆき及びお幸ひ以上役
 もあ入るまご共々くおせ連おせおせの智又つま撮りてお子のよを
 けて居御し重後もをううそおせくおづくくと白洲へ出まは依
 加るおま加とあるいそれらおまおちかやも中くおせ加アおま
 秘ち城あわの棚又居りおる奥屋お七と中よりの女房子お友の由
 段ひよあまこの科人とおゆり「あつと取り親をぶ形ひの秋さとも
 此一團は徳めありおるが女子のおさおるわお計のおやうお計中
 よめぬわいよふようくよお後ろさんて下さうおせ津おひの二巻を
 出さるお計をこ押しひききお御もは後ろさんおにいお急お急
 の中あつてお海は油におまの油を有せしは依て双方へ穿しんお
 しては出穿はしておとてお妻共の秋ひ虫おおまの角がござるを
 免てようこのおとしておまのお妻おいよを有せしとるあつとこの科
 とゆりて出穿はしてらまといのぶといのやつらお然ひしけらぬく
 まおイヤくさうまおちまおつた此も太史がなつた先後おが秋あつた
 毎りを家よりハテゆりつる免とまいつてお侍の評者おイヤサ
 評者もおちらまも入中とぬおが家来といお疵がおもつて今つた
 穿ぬいにしてさういお七の解死人もお依てうゆり親子とも穿ぬ
 おまおちらお首のせいといお急しつておまおら津お急お急お

悔ても方かひてもあびりてぬ銀の名物頼申る名ごりおまにて
 刃中まご共々妹も刃差りてくのかひよりつとるおげくをお侍の小
 姓及び伴ひ共へ入るわの妹が秋さ小姓あつとて女を人おさる
 ものよ石連石折あつて連玄園よひ入る居りおつて連連まきううい
 うさうさういおす連先をせようその形ひのゆき及びお幸ひ以上役
 もあ入るまご共々くおせ連おせおせの智又つま撮りてお子のよを
 けて居御し重後もをううそおせくおづくくと白洲へ出まは依
 加るおま加とあるいそれらおまおちかやも中くおせ加アおま
 秘ち城あわの棚又居りおる奥屋お七と中よりの女房子お友の由
 段ひよあまこの科人とおゆり「あつと取り親をぶ形ひの秋さとも
 此一團は徳めありおるが女子のおさおるわお計のおやうお計中
 よめぬわいよふようくよお後ろさんて下さうおせ津おひの二巻を
 出さるお計をこ押しひききお御もは後ろさんおにいお急お急
 の中あつてお海は油におまの油を有せしは依て双方へ穿しんお
 しては出穿はしておとてお妻共の秋ひ虫おおまの角がござるを
 免てようこのおとしておまのお妻おいよを有せしとるあつとこの科
 とゆりて出穿はしてらまといのぶといのやつらお然ひしけらぬく
 まおイヤくさうまおちまおつた此も太史がなつた先後おが秋あつた
 毎りを家よりハテゆりつる免とまいつてお侍の評者おイヤサ
 評者もおちらまも入中とぬおが家来といお疵がおもつて今つた
 穿ぬいにしてさういお七の解死人もお依てうゆり親子とも穿ぬ
 おまおちらお首のせいといお急しつておまおら津お急お急お



去宮七九の辰多

松林



大名依如右門

助松全計

工面とやらおつてみとめりてあのいどねた小あのていんまふやな
 らぬあまといひく小峠ゆふひの食めと振る子供ごうに祝めう
 物けくまといひけらぬとい女の「ア、イヤく、まの二づのう智流不
 りつゝ僕の揚修孔蝠の五六六女て如智流進」とはいくんや日
 の本正とえとけり津國子供は孝行する者があるまふといん
 びコリヤおまといひの物とせふ後へく「ト菓子とあるコリヤお
 まの身たぐりやうとよろしくお祈願のくりおそらぐくびと
 切らまうけ菓子ぐねいりお祈願サアとやドやく「トはるお祈願
 けりまう市松祈願お祈りませうとちゆつとゆこのとや志願のふ
 さいく女めつひお祈るひくお祈り「お祈りまうと縁めけり市
 松の乞願まう市松切らうとやちやの中や菓子ぐねいりお祈り

殿取「ム、宰まうお祈りていくんお祈切らうといひやちやまうま
 よあつてナア菓子とせうゆと依賀ちあぬアしんぐれい祝
 お祈りて切らまう菓子とせうゆと依賀ちあぬアしんぐれい祝
 依賀とせうゆも子供に直るものゆとせうゆとせうゆとせうゆ
 「いりまあつてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りて
 くつひお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りて
 祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りて
 ろりせ肩ひびくお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りて
 どの月代のびくお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りて
 さんトやあつてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りて
 まく今けいお祈りてお祈りてお祈りてお祈りてお祈りて
 「お祈り

敵軍は法衣の傾城町へ入るとは程なくの口痛及つてまゝ返が乳の
 ちりちり苦但しそ元うかの多里へお供は連らま困定あまの物と
 おりひれとねよまげくひらこの併法やうくうさぶ「サアそまの
 う」
 「サアさんとぞらう」
 「二」
 「周しゅう一り小大もつひこめらまてまよげ
 るのはじくくして男はまをま女お向ひ」
 「おまのいのが者
 心と感してこのうが敵ひの海り忠七う科とゆゆ」
 「明う南おと心
 こくひありがうなませい」
 「こくより軟子の飛まごう休せう
 く」
 「嬉し涙よくまごれは何がまご中つは航あてと法なちあつ
 ちやくく」
 「出」
 「耳」
 「己と今空かま中う去るうう家紋久雨して
 南地とお拂ひまて南へ入世と多夜曲事やけつとま役人ども
 とわつとまのこに」
 「まぬねは國境よりたごごご」
 「いやく先

御まよ彼が科としてこのと校とそむのこつあては口痛のうらま
 家紋久雨のうなまのこつあてまをまがれ一のまごまの法皆
 殿の心慈悲の心改その節とりのつと科とけ免まごううらま
 そんどまて心と改めよ成が將破くま不而存ゆへ幼童まめて
 方ぐくまらふあごごそのの群の末橋の下のれ死とまあうであらう
 方一大坂へま越へ若將ふサアまごうとも候よ身が母文と林おひ
 うらまの法情とわらうま合らうコリヤうらまけさうくうまあうう
 ぞよ」
 「同ちま流よのひませどわいたのむ河のま上使の足ぬうが
 ころぬ教くやお胸と度とまの」
 「おまかまあまごううまう
 今日の内昔方千方」
 「イヤまらぬあもゆ子息のまお分おをほら
 う」
 「イヤモそのまの心まごう」
 「うらまはく」
 「心内使へもよあて

一本
抄
二
辛巳年
八月

